

盛口 満(著)

# テントウムシの島めぐり ゲッチョ先生の楽園昆虫記

浅川 満彦

日本列島産のある群の生物の地理的存否や列島内変異などを研究対象にした場合、ほぼ確実に数多ある島嶼での調査が必須となり、結果として、日本独特の「島の生物地理学」が結実してきた。本書から新たな「島の生物地理学」の誕生胎動を感じた。まず、啓発的な一般書ではあるが、身近な昆虫と信じられているテントウムシ科をモデルに、著者独自の描画手法を用い綴った旅行観察記で、本文は下記目次の8章から構成されていた。

昆虫の分類体系の概要紹介、テントウムシ科の亜科構成、日本産種構成、テントウムシの生態とこれに収斂した形態を有する昆虫、採集・標本作製法など基本情報が最初と次の章で述べられていた。本文には、著者が教鞭をとる大学における学生アンケートなどが随所に織り交ぜられていた。おそらく、将来は教職に就くであろう学生諸君の生物の認識度合いを知ることが出来たのは、同じように大学生を相手にする評者には大いに参考になった。とはいっても、(義務教育の教員を目指すにも関わらず)虫が苦手であるとか昆虫形態への頓珍漢な回答などは、評者は、もはや笑話のネタにもならない程慣れていた。しかし、東京・夢の島がゴミの埋め立て地であったことを認識している学生は105人中3名という驚異的な数字には(144頁)、もはや目の前にいる若人は、日本語を話していても、別世界の住人であることを覚悟させてくれた。それでも、昆虫少年が成人となり、関連の職を得つつ夢を実現していく著者の周囲の人たち(たとえば、33頁)の存在に安堵した。これは、キャリアデザイン的具体例も読み取れ、(明らかに著者の思惑ではないだろうが)就職教育のテキストとしても学生に提示できると信じた(ちなみに、評者は勤務先で就職担当)。

はっきり区分けは出来ないが、第二章中央あたりから最終章のまでが、赴くままに訪れた国内外の島々や日本の本土各都市で得られたテントウムシの紹介とそれにまつわる人々のエピソードが綴られていた。特に、ハワイに関わる三つの章では、外来種のテントウムシの来歴について詳述されていた。生物地理学が誕生した前々世紀には予想されなかったが、今日の島嶼生物地理学が示す知見は、外来種の脅威を示すことが常套結語となっている。新参者の生物・病原体の脅威は、新興感染症アウトブレイクに直結することがある。評者が関わる衛生動物学は、ヒトの感染症・寄生虫病の病原体媒介性となる、あるいは、ヒトに直接的な害をもたらす病害動物と対峙している。今回のテントウムシ科昆虫には、このような側面がほぼ無いため、書評対象とするには、個人的には逡巡した。実際、本書で衛生動物学的な事象について言及されていたのは、ハワイの蚊の由来に言及していた部分のみであった(128頁)。しかし、感染症対策の一つに、病原体の歴史的な分布過程の解明が有用な情報を提供すると信じられつつある今日、本書は生物地理学のエッセンスを、学生諸君に示唆を与えることであろう。

本書の価値を高めているもう一つのものが充実した口絵である。本書に登場するテントウムシの種には、実物大のシルエット図を配し、かつ、成虫と幼虫・蛹も描かれていた。テントウムシの形に収斂したほか昆虫クイズも配され、とても楽しめた。ところで、テントウムシ成虫が昆虫を食べている種か、葉を食べる種かの違いで、幼虫の形態が大きく異なる(31頁)。特に、多数の大小の棘に被われる葉食性のものの幼虫を、一般の方が実物にせよ、この口絵にせよ、じっくりとご覧になれば、不快なイメージを抱くかもしれない。勝手なものであるが、実はヒトにこういった気持ちにさせるものも、不快動物というカテゴリーに入れ込まれ、衛生動物学の対象になる。やはり、評者が読むべき書であったことが、ここに来て確認されたようだ。



【署名】テントウムシの島めぐり ゲッチョ先生の楽園昆虫記【著者】盛口 満【発行所】株式会社地人書館【本体価格】¥2000【発行】初版第一刷 2015年8月1日

目 次	
口絵 1～9	
プロローグ	5
1. テントウムシってどんな虫？	13
2. 幻のテントウムシを探せ	43
3. テントウムシ屋と街歩き	79
4. 消えたオオテントウを探して	101
5. ハワイのテントウムシ	119
6. 数奇な島の虫の歴史	143
7. 青いテントウムシの正体	157
8. テントウムシの島めぐり	177
エピローグ 足元の虫	204
参考文献	210
索引	212
著者紹介	216